



Newspaper in Education

NIEニュース

エヌ・アイ・イー

第90号
2018.1.15

●特集・新しい学びと読む力▶1~3 ●第8回「いっしょに読もう！新聞コンクール」表彰式▶4~5 ●新聞の「今」—防災プロジェクトに込めた思い/アドバイザー紹介/新聞社の「ワークシート」活用してみませんか？▶6~7 ●〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2018年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル [http://nie.jp] [http://www.facebook.com/Nie47]

特集

新しい学びと読む力

主体的・対話的で深い学びの実現に向け、読書をはじめとした「読む」活動の重要性がさらに増している。これからの時代を生きる子供たちの読解力を育むためには、日常的に活字に触れること、さらには、新聞記事などの非連続型テキストを読むことが欠かせない。読む力を育成する上で、新聞活用が果たす役割とは何か。新聞コラムの読み比べや教師による読み聞かせなど、日常的な取り組み事例を紹介しながら、考察する。

次期「子どもの読書活動の推進に関する基本計画」策定に向けて有識者会議で検討してきた。読書についてそれぞれの立場で多様な意見が出されてきたが、論点を明確にすべきだと強く感じている。

楽しみの読書、理解の読書

読書の形は大きく二つに分けられる。まず楽しみの読書である。例えば、絵本の読み聞かせやブックトーク、アニメーション（読書法の一つ）などで本に興



公益社団法人 全国学校図書館協議会 理事長 設楽 敬一

味を持った子供は、音読や指し読みなどの指導を通して一人読みができるようになり、自立した読み手に成長していく。読書技術の基礎（想像力）を身につけるものであり、何より楽しさが重要だ。正確な読みよりも、純粋に喜びや楽しさを得るために行う読書であり、書き言葉レベルの言葉を使う力（読書力）を育むことができる。

もう一つは、こうした楽しみの読書にとどまることなく、著者の考えや情報を読み解きながら自分の考えを形成していく能動的な読書である。これは、課題解決学習や探究型学習に欠くことができない。つまり、教科書程度の説明文の構造を正しく

認識して、その意味を正確に理解できる指導が必要である。このように、理解の読書は、文章を正確に読み解く力を身につける必要な情報を得る手段としての読解であり、文節や主語・述語・接続詞など文章の構造を把握して、読み解くことが不可欠である。こうして、言葉の構成を体系的に追う力（読解力）を育むことができる。

読書の力をどう測るのか

国立情報学研究所の新井紀子教授が、「リーディングスキルテスト」（RST）により測定した読解力の結果を公表している。これは、教科書や新聞、マニアルや契約書などのドキュメントの意味および意図を、どれほど迅速かつ正確に読み取ることができるかの能力を測定するために、同研究所社会共有知識研究センターが考案したものである。

新井氏は、RSTと同時に実施したアンケート調査で、意外なことに定石とも言える「読書が好きかどうか」「塾に通っているか」と、RSTで測る読解力との間には、統計的に有意な関係が見当たらないことをコメントした。少数のサンプリング調査ながら、年代による能力の差もないかもしれないと示唆している。これは読書の量を前提としていた読解力育成だけではない、新たな指標が示されたものと捉えている。

これからの学びと読解力

この新たな指標を踏まえ、次期学習指導要領を見据えると、今後は物語などの連続型テキストに加えて、新聞・図鑑などの非連続型テキストを関連付けて読む力を育む必要があると考えられる。

児童生徒の主体的・対話的で深い学びを育むために、読書活動を通して、司書教諭や学校司書などが連携し、全ての教科で言語活動の充実に取り組むことが求められている。

複数紙読み比べで実現する 主権者意識の醸成



東京都教育庁指導部
主任指導主事
小林 正人

選挙権年齢を満18歳に引き下げる公職選挙法等の一部を改正する法律が2015年6月に公布された。

東京都教育委員会は主権者教育について、「都立高等学校改革推進計画 新実施計画」の「主権者意識の醸成」（16年2月）において、社会保障教育、租税教育、金融・金銭教育とともに充実させ、自立的社会人としての素養を養い、主権者意識を醸成することとしている。その醸成を図るためには、次の3点がポイントになる。

1点目は、生徒の職業意識を育むとともに、生徒自身が在学中から、より一層社会との関わりをもち、社会の一員であることを自覚するよう指導することである。生徒には、広く社会の

出来事に触れさせ、社会に対する興味・関心を高めさせることも大切である。

2点目は、議会制民主主義など民主主義の意義、選挙等の理解に加えて、現実の具体的な政治的事象も取り扱うことで、生徒が有権者として自らの判断で権利を行使することができるよう、具体的かつ実践的な指導を行うことである。その際に、現実の具体的な政治的事象は、種々の見解があることや、一つの見解が絶対的に正しく、他のものは誤りであると断定することは困難である。このため、生徒の考えや議論が深まるよう、さまざまな見解を提示するなどして、生徒自身が自分の意見を批判的に検討し、吟味することである。

3点目は、学校は、教育基本法第14条第2項に基づき、政治的中立性を確保することが求められるとともに、教員は学校教育に対する国民の信頼を確保す

るため公正中立な立場が求められることである。

これら3点を同時に満たす有効な方策の一つは、身近な新聞を教材として複数紙用意し、それらを読み比べて使用することである。

このため東京都教育委員会は、17年4月から、全ての都立高校の図書室に新聞6紙（朝日、毎日、読売、日経、東京、産経）を配備するよう予算措置を講じ

た。

学校からは、主要6紙を一度に読み比べることができるので、教育的効果が大きいことや、政治的中立性を確保しやすいなどの声が上がっている。

今後は、新聞6紙を配備した学校図書室と各教科の授業との連携が重要である。例えば、6紙の新聞から情報収集・選択してスクラップ記事を掲示するなどの実践を教科の授業と学校図

自身が執筆に挑戦する手法があ



北海道札幌南高等学校
教諭
NIEアドバイザー
志田 淳哉

コラム読み比べで育む 「主体的に自立して生きる市民」

「18歳選挙権」導入に伴い、主権者教育への関心が高まっている。今後は今以上に高等学校において「主体的に自立して生きる市民」を育むことが重要となる。時事問題を扱う授業では、新聞のコラムを読み比べ、生徒

書室が連携して行う取り組み、学校図書室でさまざまな情報を収集し自分の意見を持ちながら異なる意見や対立する意見を理解し、議論を交わすことを通して、論理的思考力や多面的・多角的に考察し、公正に判断する力などを育む取り組みなどが考えられる。東京都教育委員会も学校図書室と各教科との連携を図る取り組みを支援していきたい。

る。記者個人の考え方や経験が反映されやすいコラムは切り口が個性的で面白く、多様な視点に気付くことができる。方法として、学年通信の裏面で、本校で購読する新聞5紙のコラムを紹介している。各紙が同じ題材、同じ日付で取り上げているものを選んでおり、2017年度は5月の韓国大統領選挙、9月の陸上男子1000日本新記録、10月の衆議院選挙などを紹介した。

コラムは、「18歳選挙権」「いじめ」などテーマに注目してストックしておく集め方のほか、1月1日や5月5日など毎年同じ日付に着目する方法もある。集めるには司書教諭など、他の先生方の協力を仰ぐことが重要だ。担当者一人で頑張らず、継続して取り組める体制が望ましい。生徒には学校や公立の図書館の利用も促す。授業プリントとすると、生徒はその授業内で完結するものと思ひ込む。すべての生徒が目に見える媒体を利用して教職員にも配布すると、SHRやLHR、さまざまな授

特集 新しい学びと読む力

業の導入にも利用され、テーマへの関わり方が多様化する。

今年度取り上げたコラムの一つに10月7日付のノーベル文学賞、平和賞がある。コラムは、冒頭で具体的な事例を紹介して主張を展開することが多いので、各紙が何を切り口にしているかにも注目させる。多面的、多角

「新聞読み聞かせ」で育てる自ら考え、発信する力



沖繩市立比屋根小学校
教諭
NIEアドバイザー
佐久間 洋

比屋根小学校は、県協議会の独自認定校を経て、2014年度より実践指定校となった。今年度から「確かな学力の向上」の具体的な手立てとして毎月第1月曜日に担任による「新聞読み聞かせ」を行っている。活動するに当たり、各学年でさまざまな工夫を行っている。低、中学年では新聞に親しませることに重点を置き、興味関心

的な視点を獲得するための工夫として、生徒同士で分析して話し合う機会も設けた。そうすると、筆者によって視点や立場が異なる、さまざまな主張が生まれることが分かる。

同時に、過去3年のノーベル物理学賞、生理学医学賞のコラムも併せて配布し、比較できる

が高まるような写真付きの記事を選んでみる。記事や写真の見せ方を工夫し、難しい言葉は簡単な言葉に言い換えている。

また、ときにはクイズを取り入れたり対話したりしながら進めている。高学年では、自分の考えを持ち、発信するというところに重点を置き、授業に関連することや全員で考えてほしい記事を選んでみる。高学年でも新聞の活字は難しいので、教師が簡単な言葉に言い換えたり、補足説明をしている。そして最後は、自分の考えを友達と意見交換する場を設けている。

ようにした。前年度に生徒が書いたコラムも紹介した。その上で、生徒に「あなたならどう書くか」と提案した。字数は特に決めずに、自由に書かせた。「結論」自分の主張をまず決めて、そのために導入部にどんな具体的な事例を持ってくればいいのかを考えさせた。強制的な

今回、新聞読み聞かせを通して子供たちに大きな変容が見られた。まず全学年に共通してい



1年生全員への読み聞かせの様子

るのは「新聞に興味を持ち、社会に関心を持つようになった」「新聞が身近なものになり、家庭でも聞く児童が増えた」という2点だ。また低学年では、回数をこなすにつれ反応も良くな

課題とせず、任意の提出とした。以上の取り組みを通して、生徒は客観的な事象から自ら主体的に考え行動するためのきっかけを学んだ。今後は「主体的に自立して生きる市民」を育むために、普段から新聞に触れられる環境、特に学校図書館の充実を図る必要

り、「すごい」「なるほど」とい

う声が聞こえ、考えながら聞く児童が増えてきた。中学年では手に取って読む児童が増え、子供たち同士で記事についてのコミュニケーションが増えてきた。中には記事について疑問に思ったことを図書館で調べ、友達同士で話し合う児童も見られる。高学年では「自分なりに記事について考え、意見を持ち、発信できるようになった」「他の新聞活動にも意欲的に取り組むようになった」という意見が挙げられた。関心が高い児童からは「情報を多角的な視点から考えるようになった」「地域に関心を持つようになった」「親子で記事について話すようになった」

「親子で記事について話すようになった」という意見が挙げられた。関心が高い児童からは「情報を多角的な視点から考えるようになった」「地域に関心を持つようになった」「親子で記事について話すようになった」

性が高まると思われる。今年度、図書館が発行している館報「四面書架」において、「Newspaper In Library」(図書館に新聞を)の掲載がスタートした。新聞を読んで意見を語る新コーナーである。一つの取り組みが新しい取り組みへと派生していくことに今後も期待したい。

た」という意見も挙がった。

このように多くの成果が得られたが、今後継続していくには、いくつかのポイントがある。まず毎年、職員向けに読み聞かせワークショップを行うことが必要である。次に学校や学年単位で実践していくことである。これらを実現していくためにはNIEの担当を校務分掌に位置づけることが必要不可欠になる。また、新聞社と連携を図っていくことで、さらに充実した読み聞かせ活動が継続できる。

今後とも読み聞かせを通して新聞に親しませ、自分の考えを持ち、発信できる児童を育てていきたい。さらに、新たな活用方法を広げていきたい。

第8回

いっしょに読もう！新聞コンクール表彰式

第8回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の表彰式が2017年12月9日、横浜市のニュースパーク（日本新聞博物館）で開かれ、小・中・高校（高専）各部門の最優秀賞とHAPPY NEWS賞の受賞者に賞状と盾が贈られた。また、優秀学校賞を代表して足立区立花畑小学校の担当者を招き、贈賞した。受賞者はそれぞれが選んだ記事を執筆した記者と懇談した。

表彰式では、新聞協会NIE委員会の南砂委員長（読売東京）が「新聞を活用した学びが新学習指導要領の『主体的・対話的で深い学び』を効果的に実

現する」という認識の広がりがコンクールの応募につながっているのではないかと。新聞を通して学校や家庭で学んだことが社会につながり、生きる力となった

のであればうれしく思う」とあいさつした。

最優秀賞・HAPPY NEWS 賞受賞者と執筆者ら



表彰式にあたり、文部科学省初等中等教育局の大滝一登視学官から「これから新聞を通して視野を広げ、さまざまな事柄に対する見方・考え方を身につけ、自分の人生をすばらしいものにしてほしい」とのメッセージが寄せられた。小原友行審査委員

長（前日本NIE学会長、福山大学教授）は「受賞者のみなさんの作品には、『平和』や『輝く』といった何らかのキーワードがある。キーワードを持つことは、AIにはできないことだ。これからも自分の中のキーワードを追い求め、すばらしい人生を送ってほしい」と祝辞を述べた。

今回は全国から計4万7699編（小学生6491編、中学生2万2327編、高校・高等専門学校生1万8880編、審査対象外1編）の応募があった。1次、2次、最終審査会を経て、小・中・高校生部門の最優秀賞を各1編、優秀賞を校種別に各10編、奨励賞を計120編選んだ。また、団体応募386校の中から優秀学校賞を小・中・高校各5校の計15校、学校奨励賞を143校選んだ。

対話を通して得る気付き

小学生部門で最優秀賞を受賞

した新井美結さん（埼玉県熊谷市立熊谷西小学校1年）は、病気で髪に悩む子供に医療用ウィッグ（かつら）を贈るため、自分の髪を寄付する活動「ヘアドネーション」を取り上げた記事で母親と一緒に読み、感想をつづった。



記念盾を手にした新井さんと大澤記者

記事執筆した読売新聞東京本社の大澤奈穂政治部記者は、新井さんが記事をきっかけに自分の髪を50センチ切って寄付したことにに対し、感謝の気持ちを伝えた。さらに、漢字が読めないため新聞は母親に読んでもらっているという新井さんに「子供向けの新聞などを通して、まずは読むことに慣れ親しんでほしい」と期待した。



娘と一緒に出席した岡崎記者と中山さん

いるという意識調査結果を伝える記事を読み、母親と話し合った。朝日新聞東京本社の岡崎明子特別報道部記者から、話し合いの感想を聞かれた中山さんは「母が私のことを大事に思ってくれていることが分かり、うれしかった」と話した。

表彰式には、記事に登場したダウン症の加藤錦さんと、母の美代子さんも出席。対話の感想を聞かれた美代子さんは「中山さんが、障害者を別世界の人と捉えず、今を生きる仲間と感じてくれていてうれしい。記事の力、若者の力を感じた」と感動した様子だった。岡崎記者は「説得力ある記事にデータと生の声は欠かせない。取材を受けてくれた加藤さん親子と記事を

優秀学校賞受賞校

(15校)

- 宮城県 聖ウルスラ学院英智小学校
- 埼玉県 さいたま市立海老沼小学校
- 東京都 足立区立花畑小学校
- 福井県 勝山市立村岡小学校
- 宮崎県 日南市立鶴戸小学校
- 秋田県 横手市立十文字中学校
- 埼玉県 吉川市立東中学校
- 千葉県 野田市立東部中学校
- 岐阜県 瑞浪市立釜戸中学校
- 広島県 海田町立海田西中学校
- 岩手県 岩手県立不来方高等学校
- 宮城県 宮城県気仙沼高等学校
- 山梨県 山梨県立山梨高等学校
- 石川県 石川県立田鶴浜高等学校
- 兵庫県 兵庫県立武庫荘総合高等学校



木村記者と記念撮影する笑顔の芦川さん



最上記者の話に耳を傾ける岩田さん

受け止めてくれた中山さんに感謝したい」と述べた。
 芦川琴乃さん（高校生部門・最優秀賞、埼玉県立川越女子高等学校2年）は、親の死を美談に仕立てられ戦意高揚に利用された「誉れの子」たちが、72年

前の戦争当時は振り返った記事を読んだ。情報操作の危うさを知るとともに、批判的に読み解く力の重要性和、多角的な視点を持つことの大切さに気付いた。表彰式直前に修学旅行で沖繩を訪れ、戦争関連の史料を見た

芦川さんは「現代の感覚で、『誉れの子』をかわいそうだと思っ
 ていいのか、疑問

に思った」と朝日東京の木村司社会部記者に質問。木村記者は「取材して、親を亡くした悲しみと、光栄に思う気持ちの両方があることが分かった。記事では、その複雑な思いをそのまま伝えたかった」と答えた。

HAPPY NEWS賞を受賞した和歌山県の岩田凜咲さん（和歌山大学教育学部附属小学校2年）は、地元で活躍する人を紹介した記事で、家へ配達に来るおじさんが長年、交通指導員のボランティアを続けていることを知り、自分も同じように輝く人になりたいと感想をつづ

った。
 身近な地元のニュースを報じている新聞の良さを、「記者はすてきな人に出会える仕事」と、その仕事の醍醐味に気付いたことが、HAPPY NEWS賞にふさわしいと評価された。記者との対話で岩田さんは、「仕事は大変ですか」と毎日新聞和歌山支局の最上和喜記者に質問した。最上記者は「話してくれない人にも取材しなければならいなど、大変なことも多い。それでも楽しさと大変さが半々くらいかな」と笑顔で語りかけていた。

優秀学校賞 足立区立花畑小学校

自分の考え発信する子供育てたい

第8回コンクールでは、新聞に触れる日常的な活動を含め、特に熱心に取り組んだ意欲的な学校に贈られる優秀学校賞に15校（小・中・高各5校）が選ばれた。代表校として、足立区立花畑小学校の林恵美主幹教諭が出席した。
 同校は、コンクールへの応募

に全学年で取り組んだ。自分の考えを表現する力を育てるための取り組みの一環。日常的に、児童が選んだ新聞記事に感想を記し、校内に掲示する取り組みをしてきたことが基盤になった。林主幹教諭は「新聞は児童だけでなく、教師の話題づくりのツールにもなっている。これから

も自分の考えを発信する児童を育てていきたい」と話した。



南委員長と林主幹教諭

第8回の結果はNIEサイト
http://nie.jp/month/context_newspaper/2017/ をご覧ください。

第9回コンクール募集開始
 新聞協会は第9回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の募集を始めました。17年9月8日から今年9月9日までの新聞から興味を持った記事を選び、家族や友達と話し合い、気付いた意見を応募用紙に記入してお送りください。対象は小・中・高校（高専）生です。
 応募要領はNIEサイト
http://nie.jp/month/context_newspaper/2018/index.html をご覧ください。

新聞の「今」

東日本大震災後、被災地の新聞社は、従来の防災・減災報道の在り方を検証しつつ、従前以上に地域読者の防災意識の啓発に力を入れてきた。防災・減災報道の充実に加え、地域や教育と連携を深める取り組みを続けている新聞社に、活動の概要とその思いを「寄稿いただいた」。

防災プロジェクトに込めた思い



河北新報社
防災・教育室長
武田 真一

「あらゆる仕事と営みは人の生死、いのちに関わっている。それが東日本大震災を経験した人たちが手にした実感です」

進路を考える世代の中高生たちと語り合う機会があると、必ずそんなことを伝えている。

医師、警察官、消防署員、自衛隊員だけではない。がれきを片付けて道を開いた建設業者、救助物資をピストン輸送したトラック運転手……。多くの身の回りの仕事が被災者の幾多のいのちにそのままつながっていた。

「新聞社で働くわれわれもそ

のとおり」と話は続く。地震や津波に警戒を呼び掛ける紙面で救われたいのちがあったと思いたいが、2万人近い犠牲性が出てしまつては、努力は十分ではなかつたと反省せざるを得ない。

「住民の犠牲を少なくする気概があったか。震災後の新聞社と記者に求められるのは、人のいのちに関わる仕事の自覚と再確認。災害が起きる前から、いのちを守るために全力で備えを呼び掛け、働き掛けていくことが必要と気づきました」――。

震災の翌年、河北新報社は地域に入り込んで住民や専門家とともに震災を振り返り、必要な防災策を語り合う巡回ワークショップ「むすび塾」を始めた。

震災前の防災報道を検証する

アンケートで「紙面は避難に役に立たなかつた」と答えた被災者が4人に3人に上ったことから「情報提供にとどまらない踏み込んだ取り組みが必要」として企画した。全国や海外も含めて月1度の開催と詳報掲載を70回以上継続中だ。2016年には専任の担当部署「防災・教育室」を発足させ、NIEを含めた教育プロジェクトとの連携で深化を目指している。

一言で言うと、これらのプロジェクトは「震災被災地にある新聞社の責務」と総括できるが、起点は冒頭に触れた「いのちに関わる仕事」の再確認になる。

「いのちに関わる仕事の自覚と再確認。災害が起きる前から、いのちを守るために全力で備えを呼び掛け、働き掛けていくことが必要と気づきました」――。

震災を経験してみれば、地域住民のいのちを守ることは、新聞社、特に地方紙にとって最上位の役割であることが分かる。記事や紙面にとどまることなく、できることを進めていこう。

そんな呼び掛けは、南海トラフ巨大地震などに備える全国の地方紙にも響き、むすび塾を共催した高知新聞社や宮崎日日新聞社は高知版、宮崎版のむすび塾を始めた。高知新聞社は中学生を被災地に派遣して教訓を伝えるプロジェクトにも取り組んでいる。それぞれ新聞社の本気は、子供や地域の防災意識を大いに刺激しているという。

「いのちに関わる仕事」に学校現場の皆さんが丸ごと含まれていることは言うまでもない。学校が最終的に目指すべき教育目標が「生きる力」「ともに生き抜く力」の育成に集約できるとするならば、災害への対応、防災教育の分野は極めて重要で象徴的なテーマになる。本気になった新聞社の紙面と企画が教育現場の意欲と交わるとき、子供たちの防災意識と地域のいのちへの関心は確実に高まる。

NIEへの期待が読解力、文章力の向上だけにとどまっていではもったいない。新聞と新聞社をもっと活用してほしい。

NIE アドバイサー紹介

- ① 学校名
- ② 担当教科
- ③ NIE 実践歴
- ④ 新聞を活用するうえでの工夫を一言 (敬称略)



●群馬県
田中 克彦
(たなか・かつひこ)
①高崎市立西小学校
②小学校全科、国語科
③20年

④新聞は、「子供の知的好奇心」を高め、学校での学習と社会をつなぐものとして活用してきた。表現方法を学ぶときにも有効である。



●群馬県
大津 幸信
(おおつ・ゆきのぶ)
①群馬県立大泉高等学校
②地理歴史・公民科、総合的な学習の時間
③9年

④新聞は教科書と現実をつなぐ大切なツール。紙面を通じ、前後左右と現在を俯瞰する力身につけられるよう、授業に臨んでいる。



●鹿児島県
中野 嘉彦
(なかの・よしひこ)
①始良市立加治木小学校
②小中連携係 (担当は算数、体育、外国語)。18年度は中学校籍
③6年

④学習指導要領が基本。教育課程にのっとった内容に合う記事を活用する。時事問題を大切にしたい。毎朝新聞チェックを欠かさないこと。

新聞社の「ワークシート」活用してみませんか？

全国各地の新聞社が、学校現場で使える「学習用ワークシート」を作成している。手軽に入手でき、すぐに授業で使い、多忙な先生にもおすすすめだ。活用している先生に、その魅力を「寄稿」いただいた。また、新聞協会NIEサイトの特設ページを紹介する。

「ワークシート、ぜひ活用しよう！」



大分市立鶴崎小学校 校長 NIEアドバイザー 佐藤由美子

「パンダの赤ちゃんの名前が決まりました」「知ってる！テレビのニュースで見たよ」

朝の「NIEタイム」を行う1年生の教室の様子だ。新聞社作成の低学年用ワークシートは、写真が大きく、子供たちの大好きな動物や食べ物等の記事が多く取り上げられている。読めない字があっても、先生が見出しや記事を説明しながら一緒に問題に答えていく。学年が上がるにつれ、政治や世界情勢、経済

等、話題が多岐にわたるようになる。最近では、AI（人工知能）や食品ロス、生活に関わる法改正等、子供たちがあまり開かない面からも記事が取り上げられている。中学年以上では、話題の人や、スポーツ・芸能関係の記事が興味を引くようだ。設問には、登場する人の生き方や考え方から、自分の生き方や考え方を考えさせる工夫があり、ここが一番大きな魅力だ。

本校では毎週金曜日、朝の「NIEタイム」（15分間）の活動の一つとして、全学年でワークシートを活用している。小学版から中学・高校版まであり、対象学年や教科の表示もある。

現在は全国紙だけでなく地方紙も作成している。小学生は、社会科で自分の住んでいる校区から市町村、都道府県へと学習を進めていくので、身近な地域の記事を使っている地方紙版も先生方には好評だ。設問を変えたり、付け加えたりする。ひと手間もかけている。さらに、新聞社作成のワークシートを参考に、手作りしてみるのもよい。高学年以上なら、子供にも作れる。記事を選び、設問を考えるのは、とても勉強になるし、互いに話し合うのも楽しい活動だ。

最近、先生方にお願しているのが、ワークシートと一緒に、新聞本紙も見せてほしいということだ。私たちは、元が新聞記事だと知っているが、子供たちにとってはいつものプリントだ。新聞そのものを見せて「この面にこんなふうに乗っていたんだよ」と扱うことが、NIEとして重要だ。

私は中学校で国語を教えているが、説明的文章の読解力と、自分の考えを持ち交流する中で、

多様な価値観を認め合い深めていく力をつけたいと思っていた。主体的に読ませるには、今起きているニュースが載っている新聞記事を用いた教材がよいのは…と考えても作成が追い付かず、すぐに古いニュースになってしまった。そんなとき、新聞社作成のワークシートを知り、「これだ！」と活用を始め、多くの先生方に紹介してきた。ワークシートには新聞記事が

NIEサイトにワークシートページを開設

新聞協会NIEサイトに昨年11月、学習用ワークシート教材を紹介するページ (<http://nie>)

出でくるが、写真や見出し、前後関係から「類推する力」もつき語彙も豊富になる。新聞記事は、地図やグラフ等と本文を組み合わせて読解する「非連続型テキスト」なので、散逸する情報を組み合わせ読み解く力もつく。社会の出来事への興味関心や新しい知識、表現力（話す・書く）、優しい気持ちや豊かな発想力など、その効果はたくさんある。だからこそ、活用する先生方が増えているのだろう。

「p.worksheet」を新設した。

同ページでは、ワークシートの概要を説明するとともに、児童生徒の学びが豊かになるポイントを実際に活用している教師の声を交えて紹介している（上記大分市立鶴崎小・佐藤校長の寄稿詳細版も掲載）。

さらに、現在ワークシートを作成・提供している新聞18社のワークシートの概要、配布方法、実物写真などを掲載。各社ウェブサイトへのリンクや問い合わせ先も掲載する。

新聞社の「ワークシート」活用してみませんか？

新聞社の「ワークシート」とは

新聞社が記事やコラム、社説などを同時に印刷・作成しているワークシート教材のこと。スクリーン上の記事も印刷してプリントや見出しを載せたり、要約したりします。授業や宿題にも活用できます。

ワークシートのおすすめポイント

- 簡単・手軽に入手可能！
- すぐに授業で使えます！
- タイムリーな話題を教室に！



「飛驒に関する記事があまりありませんでした」。夏休み明けの課題を出せなかった生徒の言葉である。

2016年度、本校はNIE実践校に指定された。とにかく新聞を使った取り組みをしようと、現代社会の授業で「飛驒地域をアピールできる記事」をスクラップし、感想を書かせる課題を出した。その結果が冒頭の言葉である。もちろん実際に記事がなかったわけではない。記事が探せなかったのである。生徒にとって新聞を読むことは、教員が考える以上に難しいこと

事務局長から一言

県立飛驒高山高校は、第8回「いっしょに読もう！新聞コンクール」で、学校奨励賞、1年生女子が奨励賞を受賞した。櫛

だと気づかされた。今年度はその反省を踏まえて、「新聞の読み方」からスタートした。新聞がどのような構成になっているのか。見出しに

岐阜県立飛驒高山高等学校

教諭 櫛田 尚人

◎岐阜県高山市／校長・滝村 一彦／生徒数・約1070人

◎特色・2005年に高山高校と斐太農林高校が統合。同時に斐太高校通信制が移管されて誕生した県内最大規模の高校。岡本キャンパスと山田キャンパスがあり、全日制（普通科・農業科・商業科・生活産業科）、定時制（普通科）、通信制（普通科）の課程をもつ。



新聞切り抜き作品



LHRで興味のある記事をスクラップ

は、どのような効果があるのか。目的の記事はどうすれば見つかるのか。土台を作ったうえで「興味のある記事のスクラップ」「記事の読み比べ」「切り抜き

作品の作成」「いっしょに読もう！新聞コンクールへの応募」を行った。

成果は確実に出ている。1年目と同じ課題であれば、仕上げのスピードが上がった。出来上がった作品も見栄えのするものになってきた。そして、作品の感想を発表させると、ハッとさせられるような鋭い意見も出てくるようになった。しかし、それでもなかなか課題ができない生徒はいる。新聞を読む習慣がないのだろう。そこで、クラスの取り組みとして、私が選んだ記事を週2回読ませることにした。読ませた記事の数はまだ少ない。それでも、確実に習慣化されつつある。一度新聞を読む日を忘れて教室に行くと、「今日は新聞を読む気満々だったのに」と不満の声が漏れた。

田尚人先生を中心にNIE実践に取り組んできた成果だ。その櫛田先生が、県内の実践指定校が活動成果を交流する場で、この2年間の活動を集約して「継続は力」と発言、強く印象に残



手元に古ぼけた新聞記事のスクラップ帳が何冊かある。1975年から85年頃にかけて作っていた「マイスクラップ帳」である。◆小学6年生から高校1年生にかけて、地学と阪神タイガースが好きだった少年の切り抜きは最初、化石や火山、プロ野球のものだった。やがて関心は災害へ、炭鉱事故を契機に事件事故へ広がり、東欧やアフリカでの政変のニュースへとつながる。こんなものを作っていたことなど自分でも忘れていたが、新聞のスクラップを契機に関心が社会的な広がりを持つ過程はつきりと分かる。◆社会への関心を持つことの第一歩が個人的に好きなことから始まるのであれば、新聞の多様性と一覧性が、必ずどこかで子供一人ひとりの興味や関心にひっかかるし、新聞にはその関心を社会全体へ広げていく力があると信じている。(産経新聞大阪本社編集企画室企画担当部長 藤浦 淳)